

研究ノート

高松塚古墳の帯執足金具と銀装大刀

水野 敏典ⁱ⁾

要旨 高松塚古墳は 1972 年に発掘調査され、同年に『壁画古墳高松塚 中間報告』が刊行された。追加報告として 2011 年に再整理報告がおこなわれている。その後の資料収蔵整理の中で新たに帯執足金具等が確認されたので、この報告をおこない、これまで高松塚古墳で出土した刀装具を確認し、鉄地に銀象嵌を施した帯執足金具をもとに、観察結果と従来の見解を整理して山形と帯執足金具の装着方法を検討し、大刀の系譜について考えた。

キーワード 高松塚古墳、山形金具、帯執足金具

I. はじめに

2011 年に刊行した『高松塚古墳』(樞考研 2011) の報告後に、資料の収蔵整理の際に土壌洗浄後の木材細片等を納めたコンテナを確認した。その中に高松塚古墳のラベル(720322 石室内堆積層下層)が入ったポリ袋内に、複数の金属片等を確認した。それ以外にも、出土品取り上げに使用した半裁した竹と綿の間から金箔片や銅釘片、ガラス玉片が確認された。その後、金属片の一部については透過 X 線画像により 2 点目の帯執足金具等を確認していたが、長く報告の機会を失っていた。今回、これを報告し、山形金物について、帯執足金具と付着物の検討を通して従来研究成果を整理し、鞘との装着方法の検討をおこない、あらためて高松塚古墳出土の大刀についてその系譜について考えた。

II. 追加確認した資料

追加確認した資料は、① 2011 年報告した帯執足金具(以下、帯執足金具 1) と同一個体の方形部片、② 完形の帯執足金具 2、③ 銅片 4 点(釘片 2 点含む)、④ ガラス玉片、⑤ 金箔片である。

① **帯執足金具 1 の方形部片** 残存長 1.9 cm、幅 0.9 cm、厚さ約 0.5 cm、処理前重量 1.1g の「L」字状の鉄片である。X 線透過画像で隅に鎖状の象嵌をわずかに確認できた(図 1-①、図 3)。2011 年報告の帯執足金具(以下、

帯執足金具 1) の方形部の欠損と直接接合はしないものの、同一個体と確認でき、実測図の修正をおこなった。また、方形部の帯通し孔の内側に巻き付く黒色の付着物が確認できた。大刀を吊る帯痕跡の可能性をもつ。

② **帯執足金具 2** 全長約 2.2 cm。方形部幅 2.1 cm、方形部長約 1.0 cm、環状部の直径約 1.3 cm の鉄製の帯執足金具である(図 1-②、図 4)。大刀鞘に付属する山形と接続するための環状脚金物と組み合う。完形で付着物込みの重量は 10.7g である。しかし、錆と付着物に覆われ、方形部は大まかに形を捉えられるものの環状部や、鎖状の銀象嵌は目視で確認できない。形状は帯執足金具 1 と酷似する。X 線透過画像により帯執足金具の表裏 2 面には鎖状の象嵌が環状部から方形部にかけて施される(図 4-④・⑥)。ただし、帯の掛かる方形部上辺には表裏とも象嵌はない。想定される金具形状から遊離した位置にも象嵌線が確認できることから、一部に錆歪みが起きているとわかる。鎖状象嵌の環の大きさはバラツキがあるが長軸 0.3 cm 前後である。方形部の厚さは環状部に比べてやや薄いが断面は隅丸方形に近い。環状部断面は表裏に平滑な面をもつ隅丸方形もしくは「D」字形とみられる。

環状脚金具は、脚部の一部を目視で確認できるが、錆で細部は確認できず、透過 X 線画像によるところが大きい。全長約 1.8 cm で、直径約 1.2 cm の環状部に長さ 0.6 cm 前後の二股の脚が伸びる。つまり、棒状の鉄を U 字形

i) 樞原考古学研究所 みずの としのり

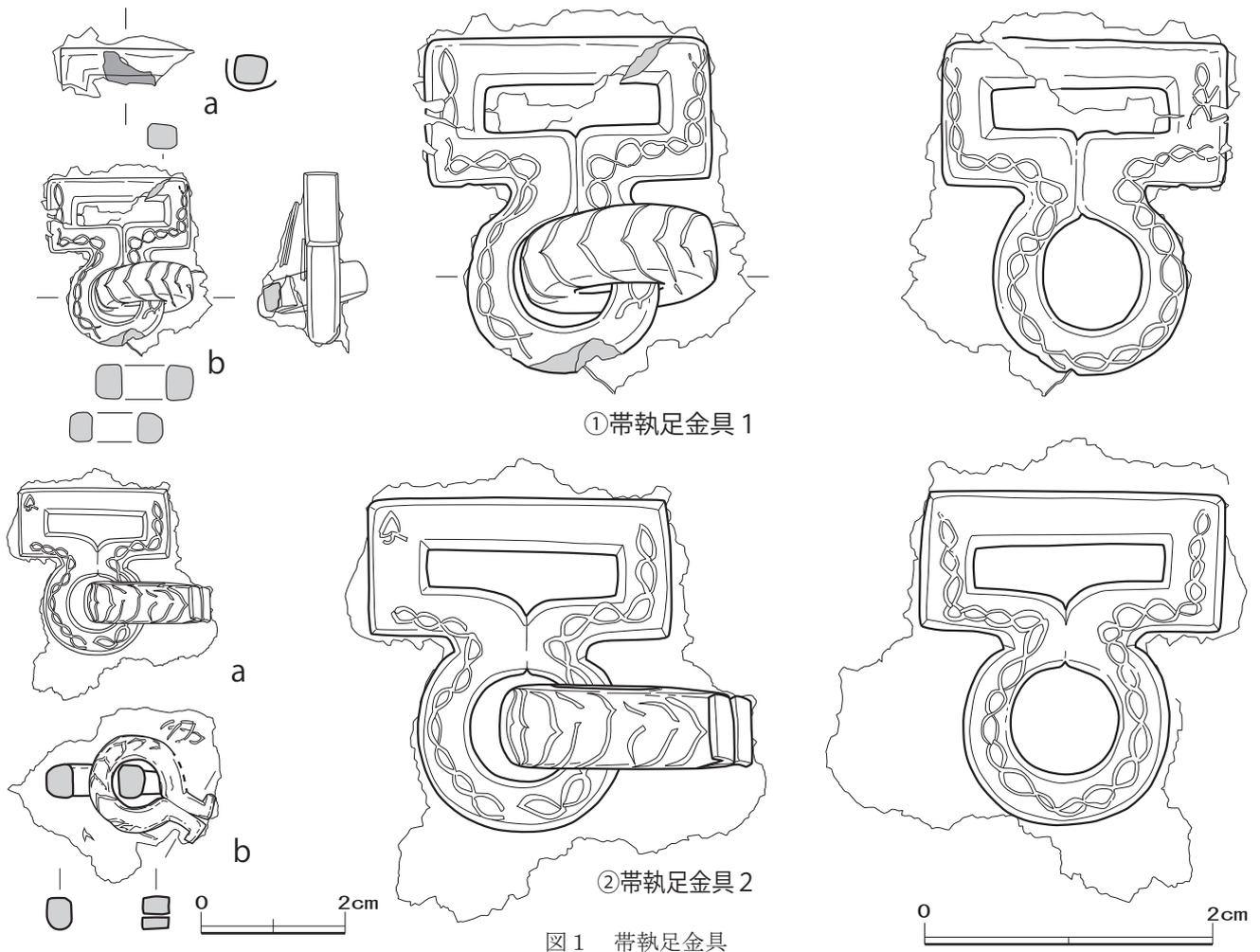


図1 帯執足金具

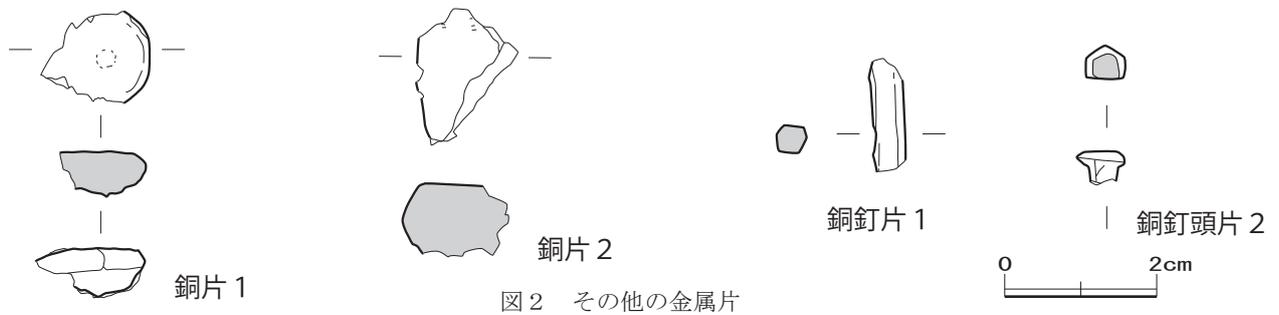


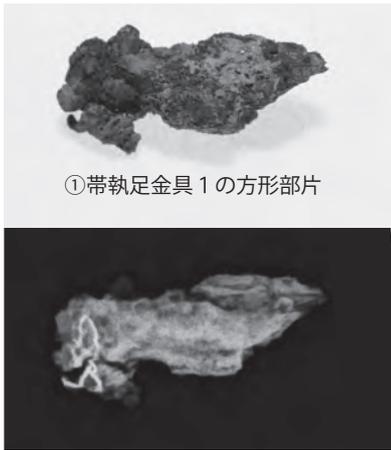
図2 その他の金属片

に曲げて帯執足金具の環状部に掛けている。一見すると環状であるが綴じておらず、山形との接合のための2本の脚部をもつ（図4-⑥）。環状部の厚さは約0.5cmとみられ、脚部の断面形は2脚を合わせると一辺約0.5cm方形となる。脚先は小さく外側に屈曲している。この環状部にも、中央付近で屈曲する縞状の象嵌が連続して施される。X線透過画像では、鉄身から浮き上がった位置に象嵌線が確認できることから、錆歪みや象嵌線の脱落が起きている。正倉院中倉3号「唐大刀」では、脚先を覆う釘隠しに水晶を使用するが、高松塚古墳の大刀で

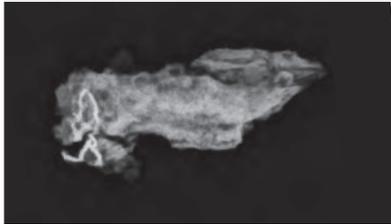
は、獣形の透かし板がその役目を果たす。また、B面の環状脚金物の脚付近に黒色の付着物と格子状の繊維痕が確認でき、繊維は組紐である可能性を持つ（図4-⑤）。また、面的な黒色痕は皮革の痕跡の可能性があり、佩用の帯や山形に関わる有機質痕とみられる。なお、象嵌は蛍光X線分析によりAgを確認しており、銀象嵌である。

③銅片 4点を確認した（図2、図5）。

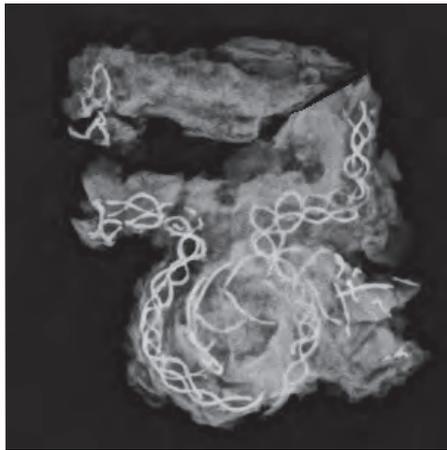
銅製品片1 残存長1.5cm、残存厚0.6cm、重量2.3gの金属片である。上面は扁平で、ボタン状であるが、縁の一部のみ本来の形状を残す。中央付近に小さい窪みを



①帯執足金具 1 の方形部片



②方形部片の透過X線画像



③2011年報告の帯執足金具 1 と方形部片



④方形部片を配置した帯執足金具 1 (B面)

図3 帯執足金具 1



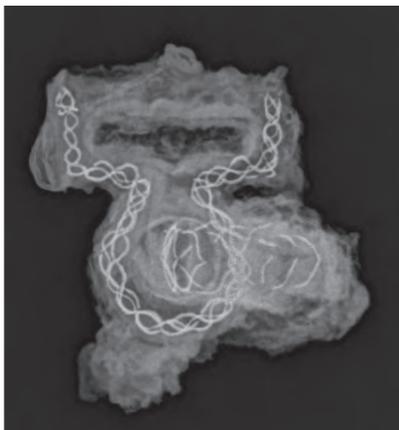
①帯執足金具 2 A 面



②帯執足金具 2 B 面



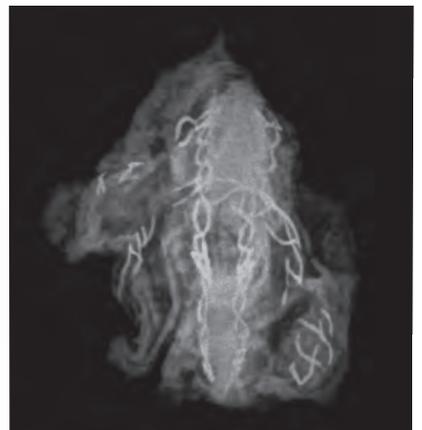
③帯執足金具 2 の環状脚金具



④帯執足金具 2 のX線透過画像

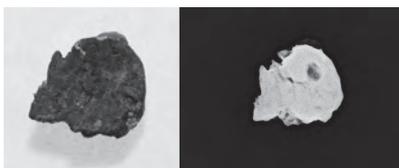


⑤付着する織物状有機質

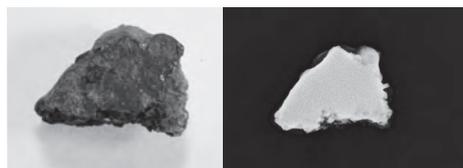


⑥環状脚金具X線透過画像

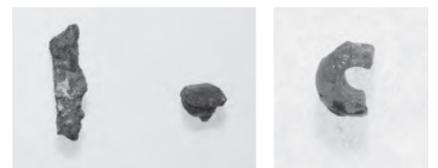
図4 帯執足金具 2



①銅製品片 1 (X線透過画像)



②銅製品片 2 (X線透過画像)



③銅釘片 1、2 ④ガラス小玉片

図5 銅製品とガラス小玉

持つが全体形状は不明である。裏面に本来の面は残らず、形状は不明である。上面は青色で主な材質は蛍光X線分析により銅と判明した。下面には白色物資が付着する。

銅製品片2 残存長1.8cm、残存幅1.2cm、残存厚1.0cm、重量5.8gの金属片である。上面に平滑な面をもち、裏面はやや荒れるが厚さは1.0cm前後で、側面は緩く凸状の曲面をもつが、全体形状は不明である。わずかに金箔が付着するが、本来の製品に付着していたものかは判然としない。主な材質は蛍光X線分析により銅と判明した。

銅釘1 残存長1.5cmの釘片で、重量1.0gである。一部錆が付着するが断面は方形を基本とする。

銅釘2 釘頭片であり、幅0.4cmほどの扁平な釘頭をもち、釘頭の厚さ込みで長さ0.5cmで、脚はほとんど残っていない。重量は0.4g。

銅釘1・2は既報告の銅釘と同様の細片であるが、銅製品1・2の性格は不明である。これまでに出土した棺飾りや銅釘、釘隠しなどの銅製品の形状に該当しない。銅製品であることから木棺および棺座に関わる可能性が高いとみられる。

④小玉片 直径3mmほどの青いガラス小玉片で、半分に欠損している。これまでに報告されているガラス小玉と同様のものとみられる。残存重量は0.1gである。

⑤金箔片 数mmほどの細片である。

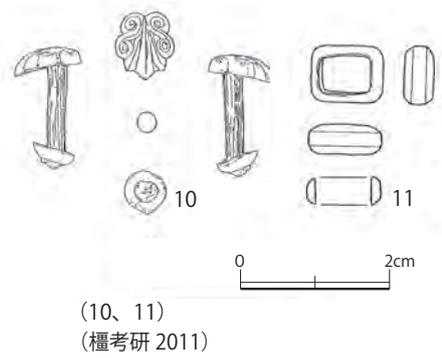
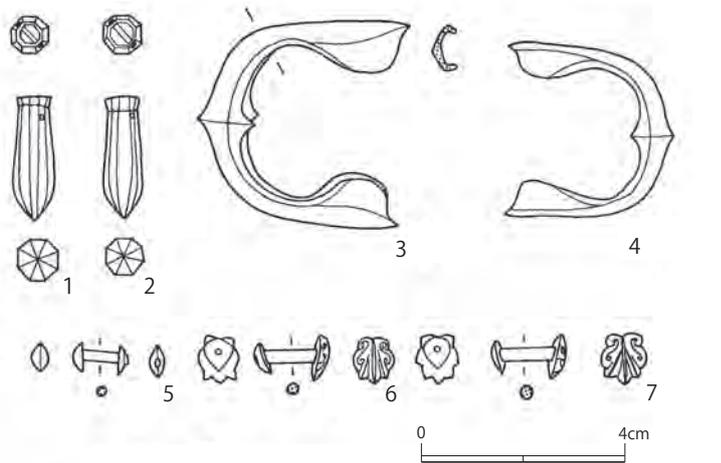
III. 山形と帯執足金具の使用法

終末期古墳出土の大刀は、出土量が少ない上に盗掘により断片的な資料となっていて検討が難しい。それでも正倉院の大刀外装の詳細な観察記載（宮内庁正倉院事務所1977）があり、古墳出土品の分析には滝瀬、津野、持田などの論考があり（滝瀬1991、津野2003、持田2013）、その成果を踏まえて考えてみたい。

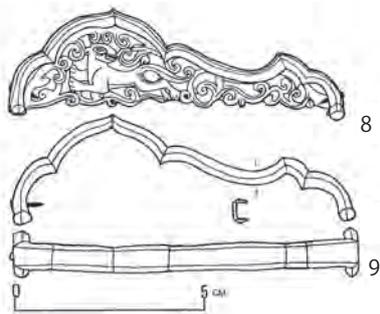
これまでに確認できた高松塚古墳出土大刀の装具は、山形の袂りを持つ銀製柄頭、柄の鮫皮を留めるための銀製俵鉾3点と鉾1点、柄に付属する紐状の「緒」につく銀製露金具2点と責金具、そして鞆尻の銀製山形袂りの金具、これに稜を持つ雲形の山形銀製覆輪、獣形の透かし板、そして鉄地の銀象嵌をもつ帯執足金具2点である（図6）。装具の多くが銀装であることから銀装大刀とみ

られる。なお、鉄身の刀身のほかに主な装具で欠けるのは、分銅形の唐鏢や縁金、懸鐙などである。

この大刀の特徴は佩用のための山形（金物）を備える点にある。一の足、二の足としてほぼ同一の山形2組を基本として、山形に付属する帯執足金具で腰帯から吊り下げる。山形に関わるものは、①短い鉾をもつ銀製覆輪、②獣形と唐草文をもつ透かし板、これに③鉄製の帯執足金具がある。また、帯執足金具は、栓抜き形で、帯を通す方形孔を持つ方形部と環状部が一体化した金物と、山形との接合のための環状脚金物で構成される。また、帯執足金具の表裏の平滑な面には鎖状の銀象嵌が、環状脚金物の環状部分にも中央で屈曲する弧線の銀象嵌が連続して施されていた。山形と鞆との接合方法は、高松塚古墳の帯執足金具が正倉院伝世品の帯執足金具と法量、形状ともに酷似することから（図7-3）、北倉38、金銀細工唐大刀1号の『正倉院大刀外装』の観察所見（宮内庁正倉院事務所1977）と出土資料もとに整理してみた（図8）。鞆の棟に、①浅い彫り込みを行い、②そこに山形を貼り付ける。③その上に薄い皮を被せ、鞆の棟側で引き合わせて漆や膠で固める。④山形の方形の孔に、山形の裏から帯執足金具の環状脚金物の脚を差し込み、⑤脚先を外に開いて山形と固定する。山形の表に⑥獣形の透かし板を鉾で固定し、帯執足金具の脚先を隠す。山形の覆輪には鉾が付属するが、山形と鞆の固定には足が短い。覆輪と山形との固定用で、山形の芯材は木製とみられる。覆輪の断面は「コ」の字状になっており、約4mm前後の幅を持つことから、山形の表につく透かし板や山形を覆う皮革、山形芯材をまとめて挟み込む構造とみられる。山形と鞆との固定は釘等に頼らず、鞆に山形芯材の貼り付けと皮革で包んだ上で漆や膠などで固めたとみられる。なお、山形の裏に帯執足金具がつき、象嵌は表裏から見る事ができた。佩用の帯は、方形部の透かし孔の法量から幅1.0cm程度の扁平な帯とみられ、帯執足金具2に付着する組紐状の繊維痕と関わる可能性があり、皮革の可能性を持つ付着物も、山形に関わる可能性を持つ。これらには別の詳細観察と分析を必要とする。高松塚古墳出土の銀装大刀は、覆輪付きの山形を持つ点で実戦向きではなく、極めて儀仗性の強い大刀であったとみられる。



(10、11)
(榎考研 2011)



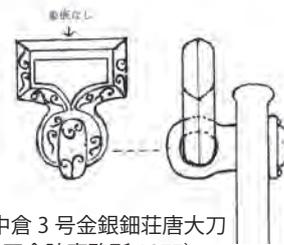
(1～9)
(末永雅雄編 1972)
『壁画古墳 高松塚中間報告』



1: マルコ山古墳
(奈文研 1979 『飛鳥時代の古墳』)
より、写真をトレース



2: 中国陝西省唐姚無陂墓
(西安市文物 2002)



3: 正倉院中倉 3号金銀細荘唐大刀
(宮内庁正倉院事務所 1977)

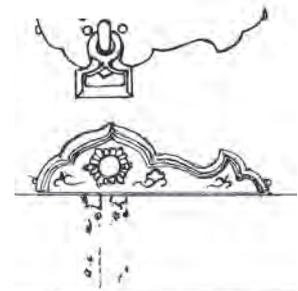
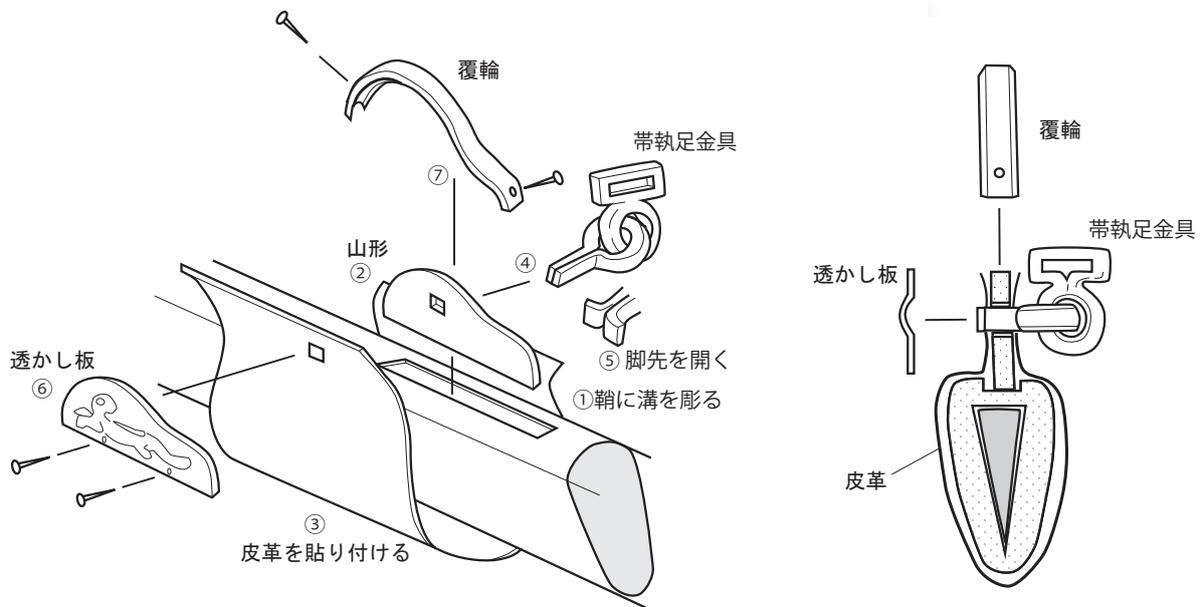


図6 高松塚古墳出土金属製刀装具
1～11 (帯執足金具以外)

図7 山形金具の類例



- ① 鞆の棟に山形 (木製) を嵌める溝を彫り込む
- ② 山形を貼り付ける
- ③ 鞆と山形を挟むように皮革を貼り付ける
- ④ 皮革を貼った山形に方形孔を穿孔し、帯執足金具に付属する環状脚金具を差し込む
- ⑤ 環状脚金具の脚先を開いて固定
- ⑥ 山形に透かし板を釘で固定し、⑤の脚先を隠す
- ⑦ 山形に覆輪を被せ、山形に釘を打って固定

図8 山形の構造と鞆との接合方法

IV 山形をもつ銀装大刀の系譜

高松塚古墳の銀装大刀の装具を見て第一に思いつくのは、正倉院（北倉 38）の 1 号大刀、金銀鈿装唐大刀であろう。『国家珍宝帳』の名称は、「唐大刀」であるが、同様な山形を持つものの呼称に「唐様大刀」がある。現代の中国研究者の間でも古代の日本側の呼称と認識されるが、「唐大刀」と「唐様大刀」の区別は確認できておらず、中国では山形を「耳付」と呼称する（曹ほか 2020）。「唐大刀」と「唐様大刀」に共通する特徴は、柄に鮫皮を貼って俵鉾で固定する「鮫皮裏柄」と佩用の鞘装具として山形をもつ点である（持田 2013）。滝瀬は隋唐との直接交流によるもの（滝瀬 1991）、津野は中国での出土例がないことから「唐大刀」を元にした日本製とみたが（津野 2003）、持田が指摘するように武周・姚無陂墓から透かし板をもつ山形の金物が出土したことで日本独自説は否定される（持田 2013）。マルコ山古墳からも透かし板と山形の覆輪片が出土しており（図 7-1）（奈文研 1979）、一定量の類品が日本に存在していたとわかる。山形をもつ大刀は、正倉院伝世品を含めて、中国からの搬入品あるいはその模倣品が混在する可能性をもつ。陝西省姚無陂墓は墓誌があり、697 年に墓主が没しており（西安市文物 2002）、高松塚古墳が 8 世紀初めの築造とみられ（奈文研ほか 2017）、これ以前に製作された透かし板をもつ山形付の大刀の年代観は整合的で、ほぼ同時期に陝西省西安と高松塚古墳に同タイプの山形をもつ大刀が存在したとわかる。

なお、山形の後出型式（持田 C 類）では双脚が付属する。山形の固定法の変化によるもので鞘に廻した皮革や金属板の縁を押さえる責金具が山形と一体化としたとみられ、同じ山形をもつ大刀であっても正倉院中倉 3 号大刀、東大寺金堂金鈿荘 3 号大刀（元文研 2015）などは明確に後出となる。山形を持つ古い例は、寧夏回族自治区固原の李賢墓にあり、中国側名称「双耳付大刀」として確認できる。これは金属板を鞘に巻き付けて山形を作り、直接、足金具が接合する（曹ほか 2020）。李賢は 569 年に没しており、6 世紀半ばにシルクロードの要衝である固原に山形の原型が確認できる。なお曹莹は、耳付を 5 世紀のトルキスタンで生まれたとして李賢墓大刀を搬入品と考える（曹ほか 2020）。

山形に透かし板と覆輪を持つ型式は高松塚古墳、マルコ山古墳、姚無陂墓にあり、高松塚古墳大刀の透かし板は振り返る獣形と唐草文が描かれ、西方を強く意識したデザインである。マルコ山古墳の山形の覆輪は金鍍金とみられ、透かし板をもつ山形がどの程度、隋唐国内で盛行したかは不明であるが、西方で生まれ中国化した儀仗刀装具であり、高松塚古墳の銀装大刀はその古い形態を残す点で、隋唐での製作の可能性が高いと考える。高松塚古墳の大刀は、隋唐勃興による激動の国際情勢の変化（水野 2014）を鋭敏に反映した品といえる。

謝辞

中尾真梨子、河崎衣美氏に X 線撮影と蛍光 X 線分析を土居紀子に作図協力を、持田大輔に助言を受けた。

引用・参考文献

- 韓兆民 1985 「宁夏固原北周李賢夫婦墓發掘簡報」『文物』1985 年 11 期
- 元興寺文化財研究所編 2015 『国宝 東大寺鎮壇具保存修理調査報告書』東大寺
- 宮内庁正倉院事務所 1977 『正倉院の大刀外装』小学館
- 末永雅雄編 1972 『壁画古墳高松塚 調査中間報告』奈良県教育委員会、明日香村
- 西安市文物保護考古所 2002 「唐姚無陂墓」『文物』12 期
- 曹莹他 2020 「李賢墓出土環首刀」『文物天地』2020 年第 11 期
- 滝瀬芳之 1991 「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 津野 仁 2003 「唐様大刀の展開」『研究紀要』第 11 号(夙)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 奈良県立橿原考古学研究所 2011 『高松塚古墳 奈良県橿原考古学研究所附属博物館保管資料の再整理報告』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第 12 冊
- 奈良国立文化財研究所編 1979 「マルコ山古墳」『飛鳥時代の古墳』飛鳥資料館
- 奈良文化財研究所ほか編 2017 『高松塚古墳発掘調査報告』文化庁ほか
- 水野敏典 2014 「終末期古墳の時代」『特別展キトラ古墳壁画』東京国立博物館
- 持田大輔 2013 「律令制儀刀の成立に関する一考察」『技術と交流の考古学』同成社